

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 12 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520512

研究課題名(和文)『国語』の批校本と校勘学の研究

研究課題名(英文)A study of Some Criticized Edition of Guoyu and the Methods of Textual Criticism

研究代表者

小方 伴子(Ogata, Tomoko)

二松學舎大學・文学部・准教授

研究者番号：10347255

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本課題における具体的な研究成果は以下の通りである。

恵棟、段玉裁、顧千里等によって『国語』の版本に書き入れられた題跋、校勘記、校語が、段玉裁『説文解字注』及び顧千里『国語札記』にどのように利用されているかを、批校本の原本調査の結果をもとに明らかにした。恵棟、段玉裁、顧千里等の『国語』校本の調査を踏まえて、『国語札記』(周語上)の詳細な訳注を作成した。江戸時代後期における清朝校勘学の需要を考察するための基礎作業として、秦鼎『国語定本』に関する初歩的調査を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study, I researched some criticized editions of Guoyu, and showed how the scholars of the latter part of the Qing dynasty, such as Gu Qianli and Duan Yucai, had used the notes written in the Guoyu editions for their writings about old documents.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：中国語学

キーワード：『国語』 『国語札記』 『説文解字注』 批校本 校勘 顧千里 段玉裁 恵棟

1. 研究開始当初の背景

『国語』の伝承、校勘、注釈に関する研究は、大野峻氏『国語』(1974)、李慶『顧千里研究』(1989)などによって着実な成果が挙げられている。しかし『国語』の批校本を利用した研究は、国外国内を通じて報告者の「宋明道二年刊本『国語』の黄丕烈重刻について」(2008)以前にはみられない。

報告者は2008年度以降、批校本を利用した『国語』の研究を進めている。2010年度までに、「『国語札記』における段玉裁校語について」(2009)、「『国語』段玉裁校本とその臨本」(2010)、「段玉裁『説文解字注』における『国語』の引用テキスト」(2011)などの成果を公表した。さらにその検討過程において、段玉裁『説文解字注』にみられる『国語』の引用の分析、『国語札記』の成立過程の解明という新たな課題を得た。

2. 研究の目的

本研究の目指すところは、清朝の校勘学者や蔵書家によって『国語』の版本に書き入れられた題跋、校勘記、校語などが、清朝人の『国語』の札記や注釈、及びその他の著作にどのように利用されているかを、批校本の原本調査の結果から導き出すことにある。これは報告者が2008年度以来取り組んでいる課題であり、本研究ではおもに次の三点を具体的な目的とする。

(1) 段玉裁の『国語』の校勘作業 その原則と手順

報告者は、「段玉裁『説文解字注』における『国語』の引用テキスト」(2011)において、『説文解字注』の『国語』の引用テキストは、段玉裁自身の『国語』批校本(書き入れ本)であるということ論証した。本研究ではそれを踏まえて、『説文解字注』に引かれている『国語』の字句の分析を行う。さらにその結果をもとにして、段玉裁の『国語』の校勘作業における原則と手順について検討を加える。

(2) 『校刊明道本韋氏解国語札記』の成立過程と特徴

顧千里撰『国語札記』(以下、『国語札記』)は、『国語』を読む上で、汪遠孫の『国語明道本考異』と共にもっとも重要な参考文献とされる。『国語明道本考異』は、公序本との異同をほぼ網羅的に示したものである。しかし『国語札記』はそれとは性格が異なり、諸版本及び関連文献による校勘及び先人の校注の引用には、執筆者の見識が強く反映されており、「読む人が読めばわかる」という書き方になっている。本研究では、『国語』の諸版本、黄丕烈、顧広圻、惠棟、段玉裁などの『国語』批校本、

『国語補音』『史記集解』など関連資料を参照しつつ、『国語札記』の編集過程及び編集原則を明らかにしていく。さらに『国語札記』の詳細な研究を通して、乾隆嘉慶年間の校勘学のあり様、宋刊本重用の実態等を明らかにする。

(3) 『国語札記』の訳注作成

『国語札記』には、陸敕先、惠棟、戴震、盧文弨、段玉裁などの『国語』批校本の書き入れや、段玉裁、黄丕烈、李銳、夏文燾など撰者顧千里と交遊のあった学者や蔵書家たちの校語が適宜或いは随意取り入れられている。本研究では、現存する『国語』校本を可能な限り参照し、当時の資料にもとづいた訳注を作成する。

3. 研究の方法

本研究では、『国語』の批校本に書き入れられた題跋、校勘記、校語などが、清朝人の『国語』の札記や注釈、及びその他の著作にどのように利用されているかを、批校本の原本調査をもとに論じた。研究に利用したおもな版本(批校本)は下記の通りである。

(1) 国語二十一卷 吳韋昭注 明嘉靖七年金李澤遠堂刻本 顧之遠校並臨段玉裁校跋 八册(中国国家図書館所蔵)

(2) 国語二十一卷 吳韋昭注 明新建李克家校刊本 顧廣圻朱墨合校並跋 二册(台湾故宮博物院所蔵)

(3) 国語二十一卷 吳韋昭注 清孔氏詩禮堂刻本 黄丕烈、顧廣圻校並跋 四册(中國國家圖書館所蔵)

(4) 国語二十一卷 吳韋昭注 明刻本 惠棟校注並跋、周星詒、翁斌孫跋 六册(中國國家圖書館所蔵)

(5) 国語二十一卷 吳韋昭注 明萬曆十三年吳汝紀刻本、盧文弨校並跋、葉德輝跋 六册(中國國家圖書館所蔵)

4. 研究成果

(1) 段玉裁『説文解字注』引『国語』考

段玉裁の『説文解字注』は、三百種以上の古文獻の使用例を論拠として、『説文解字』に注釈を施したものである。従ってその成果を参照する際には、しばしば引用文獻の原典に戻り、前後の文脈や字句そのものを確認することになる。

本研究の目的は、段玉裁が『説文解字注』に『国語』を引用する際に、どのような原則で原典の字句に改変を加えたのかを、帰納的に論じることにある。この試みは、『説文解字注』の『国語』の引用を、段玉裁の解釈に即して読み解くために必要な作業であると同時に、『国語』を媒介として『説文解字注』の引用文獻に対する文字改正の一端を示すという点でも意義がある。さら

に『説文解字注』の『国語』の引用文に施された改正は、段玉裁の『国語』の校勘記であり、『国語』研究にとっても重要な資料である。

本研究の考察は、そのテキスト(顧千里校本)の原本調査にもとづいている。結果は以下の通りである。

『説文解字注』における『国語』の引用文の字体には、段玉裁の正字意識にもとづく校勘作業が施されている。底本と書き入れの文字が異なる場合は、段注の記述にそった正字・今字が採用されている。書き入れがなくとも、底本の俗字を正字に改めている例もみられる。また假借字も、段注の考証にそって本字に改められている。底本と書き入れの文字が異なる場合は、ほぼ例外なく本字の方が採用されている。書き入れがなくとも、底本の假借字を本字に改めている例もみられる。

古文献を用いた校勘作業には、段玉裁校本の校語、『国語補音』(『旧音』も含む)の記述、『説文解字』における許慎の『国語』の引用の三点がおもに利用されている。

では、『旧音』の音注、『国語補音』の見出字の字句が考証の根拠とされている。

(2) 顧千里撰『校刊明道本韋氏解国語札記』成立考

清朝嘉慶五年(1800)、江蘇長洲の蔵書家黄丕烈は、当時抄本の形でしか伝わっていなかった宋刊明道二年本『国語』を約八百年ぶりに重刻刊行する。本研究で取り上げる『国語札記』は、宋刊明道二年本『国語』の重刻に合わせて刊行された校勘記である。黄丕烈の名で刊行されているが、実際の撰者は顧千里である。

顧千里は『国語札記』の執筆に当たって、北宋宋庠撰『国語補音』と自身の『国語』校本とをおもな校勘資料とし、恵棟、段玉裁、黄丕烈などの『国語』校本の書き入れを直接或いは間接的に引用している。本稿では、『国語札記』の成立過程を、撰者顧千里が利用した文献や校本にもとづいて論じる。

本研究では、恵棟、顧千里、黄丕烈などの『国語』校本の書き入れを手掛かりに、『国語札記』に収録されている校語の来源を探り、その成立過程を明らかにした。結果は「顧千里撰『校刊明道本韋氏解国語札記』成立考」(2012)に示した通りである。校勘学者や蔵書家の校本という一次資料を用いたことにより、当時の校勘学の手順をより具体的な形で提示することが可能となった。

(3) 『校刊明道本韋氏解国語札記』「周語上」訳注

上で述べたように、『校刊明道本韋氏解国語札記』(=『国語札記』)は、『国語』研究における基本的かつ重要な資料であ

る。報告者はこれまで数年にわたって『国語』批校本の現地調査を行ってきた。本研究ではその結果をもとに、『国語札記』(周語上)の詳細な訳注を作成した。

(4) 秦鼎『国語校本』初探

『国語定本』は宋刊明道二年本の重刻版を校勘に用いたはじめての和刻本であり、以後明治に至るまで『国語』の代表的なテキストとして利用された。『国語定本』には、重刻明道本や明刊評本などによる校勘作業の記録、清朝校勘学者の校語、秦鼎及び江戸時代の漢学者たちの校語や評語などが収録されている。これらの記載は江戸時代の漢学者の校勘作業、とりわけ彼らが明清の学者たちの校語や評語とどの様に向かい合ったかを考える上で重要である。『国語定本』の校勘作業の詳細を論じるに先立ち、編者秦鼎が校勘作業に用いた明清刊本についての初歩的な調査を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

小方伴子、「段玉裁『説文解字注』引『国語』考」、『日本中国学会報』、査読有、第63集、2011年、pp.188-203。

小方伴子、「顧千里撰『校刊明道本韋氏解国語札記』成立考」、『人文学報』、査読有、No.463、pp.1-24。

小方伴子、「『校刊明道本韋氏解国語札記』「周語上」譯注」、『人文学報』、査読有、pp.65-90。

小方伴子、「秦鼎『国語定本』初探」、『二松』、査読有、第28集、pp.3-20。

〔学会発表〕(計2件)

小方伴子、「黄丕烈・顧千里編『校刊明道本韋氏解国語札記』の来源、体例及び資料的価値」、日本中国学会第六十三回大会、2011年、九州大学。

小方伴子、「日本刻本『国語定本』的校勘」、国際学術シンポジウム「校勘と經典」、2013年、ネストホテル那覇。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

特になし。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小方伴子 (OGATA TOMOKO)

二松学舎大学・文学部・准教授

研究者番号：10347255